

あびこの文化

発行人
村上智雅子
我孫子市
若松122-6
04(7184)
1804

放談くらぶ報告

「武者小路実篤と我孫子」を聴いて

我孫子の景観を育てる会 会長 中塚 和枝

令和七年六月二一日、我孫子の文化を守る会会長の村上智雅子さんの講師で放談くらぶ講演会が開催されました。

大正初期の一時期、我孫子に白樺派の御三家、柳宗悦、武者小路実篤が在りました。それは、まず嘉納治五郎が明治四四年に我孫子の天神山に別荘を建てたことの縁で、西隣の三樹荘に甥の柳宗悦が大正三年に住むことになり、大正四年に柳が志賀直哉を呼び、大正五年には志賀が武者小路を誘いました。三人は毎日のように船や徒歩で交流し、文芸談義などをした様子が各々の小説やエッセイの中に描かれています。柳宗悦邸に窯を築いた陶芸家バーナード・リーチも一時期滞在しました。

『白樺』は同人の文学だけではなく、西洋の文学や美術も紹介した芸術の雑誌でもありました。明治四三年に創刊され、関東大震災時（大正一二年）に原稿が焼失して廃刊になり、一六〇号まで発行しました。

我孫子に住んだ短い期間に武者小路実篤は、ここで「新しき村」の構想を練り、長年心に描いていた理想郷建設のため宮崎県へと旅立ち、志賀直哉は代表作を発表しました。白樺派の文人たちにとって我孫子は再生の地であり出発の地でもあったようです。

千葉県民が選んだ「ちば文化資産」二五〇件のうち、我孫子市では「白樺派と文人の郷」「天神坂」「布佐地区の江戸文化遺産」、広域では「手賀沼花火大会」「手賀沼周辺の公園群」が選ばれています。まさに我孫子は自他ともに認める「白樺派と文人の郷」なのです。

講演の最後に、三協フロンティア(株)監査役 石黒博氏より、三協フロンティアグループが所有する「旧武者小路実篤邸跡」を今年一一月まで第二、第四土曜日に一般公開すると発表がありました。我孫子市教育委員会の後援を受けて一般公開し、我孫子の景観を育てる会が協力します。

以前にも散策とセットで特別公開の協力をしたことがあります。散策コースは我孫子駅から出発し、杉村楚人冠記念館、志賀直哉邸後、白樺文学館、柳宗悦の三樹荘、最後は、旧武者小路実篤跡へと、白樺派の文人たちが歩いたハケの道です。金沢や豊橋からも参加されていて、白樺派の根強いファンに驚かされました。

今まで門の外から覗き見だけでしたが、地域貢献に考慮された三協フロンティア(株)のご好意により、白樺派の御三家旧邸宅跡の最後のピースが揃い、公開されます。一般市民として深く感謝いたします。



講師 村上智雅子氏の放談くらぶの概要が13～14頁にあります。

放談くらぶ感想文

「武者小路実篤と我孫子」の講座を受けて

参加者 金子 紀子

我孫子に住んで約五〇年近くになります。

古希を過ぎて、色々な仕事やお役から退く時期になりました。そんな時、知り合いの村上智雅子さんから「武者小路実篤と我孫子」の講演があると誘い頂き、即決で参加させて頂きました。

文学に素人の私ですが、村上さんのお話が、すうーと心に入ってきました。武者小路実篤は、一九一六年の暮れから、一年九ヶ月という短い期間でしたが、その間に小説家、劇作家としての活動が熟成されていったように感じました。私の目の前にある手賀沼やこの緑の多い土地で、実篤と志賀直哉が青年時代からの友情を再確認し、若い頃共に出会ったメーテルリンクの思想を持続していて、武者小路実篤は新たな気持ちでトルストイの思想と向き合い、トルストイが一時期思い描いていた理想郷に影響を受けて、「新しき村」の構想を得たと伺いました。志賀直哉も実生活でメーテルリンクの調和思想に影響を受け、武者小路との交流でスランプを脱したようです。

心の友と一口に言いますが、なかなか持続することは難しいものです。この我孫子で、武者小路と志賀が更に友情を深めたと思うと熱いものが込み上げてきます。

講座の最後に、漱石は則天去私という高い境地になりましたが、実篤は則天我有の境地に至ったとおっしゃっていました。メーテルリンク流の自己肯定は、現実生きる力を得ます。素晴らしい考え方だと思いました。村上さんのお話が胸に広がり、つまらない私の僻む心が講座の終わりに、溶けているように感じました。私が好きだったメーテルリンクの「青い鳥」は、この地に、私の隣にいますことでしょう。

プロジェクト 巨木・銘木をめぐる会

一橋大学国立キャンパス樹木観察会

参加報告

佐々木 侑

六月二十八日土曜、朝から異常な猛暑の中、九時に集合場所の我孫子駅に四名が集合しました。朝から暑さが厳しく欠席の連絡もあり、出席者も無理をしない申し合わせで出発することにしました。

千代田線で新松戸駅經由武蔵野線に乗り換え西国分寺で中央線乗り換えて国立駅に一〇時三〇分頃到着しました。

気温は三〇度を超えていると思われ、各自水分を十分に持ち、炎天下の大学通りから一橋大学に向かった。(本来であれば中止するのが正しい判断と思われる程の猛暑日でした。)

大学通りは両脇に広い歩道があり、ソメイヨシノ・オシマザクラ・ヤマザクラの桜樹木と、ケヤキの巨木で車道と区切られ、さくらの樹木は巨木と思われる程に葉が生い茂り、歩道は木陰で覆われ歩きやすい歩道でした。歩き始めて一〇分も経たないうちにすぐ車道を挟んで東西のキャンパスに到達しました。

一橋大学は国立駅の南に位置し、駅から直線の大学通りを隔てて東西にキャンパスがあり、その面積は約三二ヘクタールです。

多摩川の作る河岸段丘面に位置し、かつては広大な武蔵野の森があったところです。宅地化の進んだ国立市内において、今もなおキャンパスには広大な武蔵野の樹木林と自然が残ります。

因みに一橋大学の歴史としては、

「旧東京商科大学が、大正一二年(一九二三年)の関東大震災で神田一ツ橋校舎が壊滅的被害を受けたため、国立市にキャンパスを昭和五年(一九三〇年)に移した。このとき整備された旧東京商科大学の校舎群はロマネスク様式で統一され、建物には特有の不可思議な動物等の彫刻装飾がみられます。現在、一橋大学のキャンパス内には東京商科大学時代の建築物が六棟存在します。」

まず東キャンパスから樹木観察を開始。

この東キャンパスは中央広場にメタセコイアの巨木が二本まっすぐに屹立しています。構内も広くはななく多くの樹木が構内に観られますが、目立った樹木は見当たらない状況でした。

大学の本部は西キャンパスであり、正門には校章が掲げられていました。

樹木と樹木の間に威厳のある正門が構え、土曜日ではあるが学生の出入りも多く一般の構内散策者もみうけられ、開かれたキャンパスと見受けられます。日差しが強いいため木陰を求め観察会を進めて行きましたが、歴史的な巨大な建造物は充分な間隔をもち、樹木がまわりを取り囲み日陰を歩くことはたやすく、木陰を通りすぎる爽やかな風も心地よい環境でした。



陸上競技場の脇の二本のスズカケノキは紛れもない幹周り四m以上もある巨木でした。



陸上競技場・野球場と磯野研究館・第二研究館の間にある小池の周りにはクスノキの数本は幹周り四m

五m以上もある巨木でした。

その他池の周りにはコナラ、クヌギ、シラカシ、イチヨウなどの巨木も観察されました。



この場所は池のカルカモの親子が遊んでいる姿に見とれ、皆さんでしばしの休憩を楽しみました。その他、運動場、いこいの広場、休憩場所などキャンパス内にはアカマツ、クヌギ、コナラ、ケヤキ、イヌシデなどの武蔵野の森を代表する樹種がありました。またさらにイロハモミジ、イチヨウ、クス、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、イヌザクラ、エノキ、ムクノキ、クスノキ、ミズギ、エゴノキ、コブシ、タイサンボク、メタセコイア、ウメ、スダジイなどの多くの樹木と多くの野草を見ることができました。

午後二時近くには、キャンパス樹木観察会を終了し、近くのファミリーストランで冷たい飲み物と食事をし、熱中症にならなかったことを喜び合いました。猛暑の中での充実した観察会でした。

樹木に覆われた東京商科大学時代の 建築物と怪獣の彫物

● 東本館…昭和四年（一九二九）竣工。
商学専門部本館。文部省建築課設計。東本館…
国登録有形文化財



● 兼松講堂…昭和二年（一九二七）に竣工。
設計は伊東忠太。兼松講堂…国登録有形文化財



● 西本館…昭和五年（一九三〇年）竣工。
文部省建築課設計。国登録有形文化財



● 附属図書館…昭和五年（一九三〇年）竣工。
文部省建築課設計。国登録有形文化財



● 旧門衛所…昭和六年（一九三一）竣工。
旧門衛所…国登録有形文化財



考え方が述べられています。

● 「妖怪研究」
兼松講堂の設計者の伊東忠太氏は、怪獣というよりも「妖怪」に造詣が深く、「妖怪研究」という論文まで出しています。ばけものの起源、各国のばけもの、ばけものの分類、ばけものの表現などについて論じられています。が、「ばけもの」についての定義と

史跡文学散歩

「日本橋界限を歩く」を再開します。

- ・日時:10月22日(水) 9:00(我孫子駅改札口)～15:30頃
- ・行先:中央区日本橋一帯(予定:例示)、
日本橋、三越本店、コレド室町、貨幣博物館、他
- ・講師:越岡 禮子 氏 (当会顧問) 雨天決行
- ・要旨:5月開催の文化講演会を基に「暗夜行路」などに書き表わされた当時の『日本橋界限』に思いを馳せながら、新しい街づくりが進んでいる日本橋界限を散策します。
- ・定員:20人(前回申込者優先) 参加費:500円(会員無料)
(※参加費に参加者本人の交通費・昼食代など別)
- ・申込:9/14～10/5 の間に氏名・電話番号を記載したメール
で申込む ashit.aka1114@gmail.com
- ・その他:鉄道等で移動、現地で昼食を取ります。(店舗等未定)
- ・問合せ先:芦崎 敬己 080-5029-6844

「連載第14回」

《世田谷の頃の新田京平ファミリーを知る・その7の1 世田谷育ちの「はたおり虫」》

―染織家・原田麻那(まな)ミニ評伝―

画家・歌人 原田京平とそのファミリーの旧宅跡地
(現 加藤様邸ⅡKフラットⅡ東京都世田谷区
桜丘四一九―三十六) 探訪・取材の記

平林 清江(会員)

「君は機織り虫だね」と柳先生がおっしゃった。
柳悦孝先生が、弟子の麻那への親愛表現として
用いたものとのことで、平成二三年九月三〇日、や
はり、弟子の清水明子先生の個展会場銀座和光に
て、生前の麻那を知る国画家会員の方から伺ったエ
ピソードである。

筆者は、「機織り虫」について書かれた資料には、
いまだ出会っていない。また、他の人が使用してい
るのを聴いたこともない。

それ故、「はたおり虫」を、この稿の題名にさせて
いただくことにしたのである。

「本稿・麻那のエピソード」から

はじめに

世田谷育ちの「機織り(はたおり)虫(むし)」、

原田麻那の人間像・仕事を語るころみ

平成二十二(二〇一〇)年の十一月に、原田麻
那の御養子の原田喬氏と原田麻那の資料に出会っ
て十余年が経過した。その間、さまざまな関連の文
字資料を見せていただき、また生前の麻那を知る
人々(国画会の織物作家、女子美術大学の関係者
の方々など)にも出会うことが出来た。

さらに、幸運なことには、世田谷桜丘の原田京
平旧宅跡地に住まわれる、加藤充子様にも出会う
て、世田谷の頃の新田ファミリーを知る第一歩も
踏み出した。それ故、「世田谷育ちの染織家原田
麻那の人間像・仕事を語る」ための試みにも、一度
はチャレンジしようとしたのであった。

しかし、筆者が最も苦手な染織・意匠(デザイン)
の分野のことであつたので、書く事には大きなた
めらいがあり、長い間、どうしたら「麻那という人間
像」に出会えるか考えて、もう私には無理なことと
あきらめたこともあった。

しかしながら、それでは、筆者のためにいろいろと、
お骨折りくださった方々へ感謝の気持ちを伝えるこ
とが出来ないではないか、と思い直し、不完全なが
らも書きのこすことにしたのである。それが、本年
六月のことであつた。

かくして、「原田麻那のミニ評伝」は、本シリーズ
の《その7》に位置するという仕儀になつてしまつた
のである。

麻那の人生における「三人の父(性)」について

それでは、どうしたら「麻那の人間像・仕事」につ
いて、理解し、且つ語り、そして伝えることができる
だろうか？

さまざまな資料から浮かびあがる「麻那の人間
像・仕事」を考える時、麻那の人生において、特に
「三人の会うべき父(性)」に出会っているということ
に気づいたのである。三人の人物のそれぞれが、麻
那の成長過程における、会うべき時に出会っている
ということである。

自らを恃む力を得る

父である原田京平・教育者としての赤井米吉先
生・そして一生の師となる柳悦孝先生、三人の無
限に深い優しさに出会い、麻那の才能が見出され、

育まれたことにより、作品を創る自信をわがもの
とし、仕事人として芸術家としての孤独と苦悩を
乗り越えてこられたのは、この「三人の会うべき父性」
に抱かれて、自らを恃む力を得ていたからと思える
のである。

麻那自身が、深く理解し愛されることにより、
あるいは、その愛された記憶を糧として、染織家と
しての長い道のりを歩んでこられ、才能を充分に開
花させ、膨大な作品をのこし、その逝去後も、多く
の着物ファンや織物ファンの目を楽しませている。

近年、筆者が拝見した麻那の作品は、本文中で
も紹介したが、平成三〇(二〇一八)年に茨城県
陶芸美術館にて開催された、「いばらき工芸大全
Ⅲ 染織の巻」展における、着物の作品、二点「つ
じ野」、「蘇芳地のしめ」であつた。どちらも六五年
前の制作であるが、「私の着物は、ひろげても、ま
とつても良いものである」と、麻那が自作への確固とし
た自信を語ったように、未だ作品にはその力が宿り
光彩を放っているのである。

麻那と、父・赤井先生・柳先生とのかかわり

さて、麻那に、自らを恃む力を授けたその三人
の人物とは、先ず父である「原田京平」、次に世田
谷の頃の「明星学園の園長赤井米吉」、そして昭和
二十三年に弟子入りし、麻那の一生の師となる
「染織家の柳悦孝」のことである。

麻那と、父・赤井先生・柳先生とのそれぞれの
かわりを解いてゆくと、原田麻那の人間像・仕事
が一筋の流れとして理解されて来るように思われる。
「父と麻那」については、父と子という原初的な
テーマとなるので、筆者の力では、とうてい語りつ
くせないで、特に論じないが、本シリーズを一通り
ご覧いただけたらならば、何かを感じて頂けるかも
知れない。

また、「赤井米吉と麻那」とのかかわりについては、《シリーズその4》の中で述べているので、ここ《その7》では、主に、「柳悦孝と麻那」とのかかわりを通して、原田麻那の人生・仕事、さらには人間像までを語る試みをしてみたいのである。

では、「柳悦孝と麻那」とのかかわりを考え、述べる前に、麻那の生い立ちについて簡単に解説しておきたいと思う。麻那が柳悦孝に出会う以前の幼少期に何を感じとり、また、その成長期には何を学びの蓄積として来たのか？

麻那の「感性」と「教養」が培われ育まれた土地、

我孫子と世田谷

原田麻那（はらだ まな）は、原田京平・睦夫妻の長女として、大正十一（一九二二）年一月十七日、千葉県我孫子町に生まれた（注1）。両親ともが画家であり、父京平は歌人でもあった。

昭和三年三月、麻那の小学校入学と同時に一家は、我孫子町を離れ上京し、先ず世田谷の若林に転居した。さらに、昭和五年三月には、同じ世田谷の五丁目二八四九番地に三〇〇坪の土地を購入し、住居とアトリエ「聚文画室」を建築し、落ちついた。昭和十一年一月には、父の京平が病気のため早世する。その後、戦争の為、昭和十九年十二月、十五年住んだ同所を売却。

昭和二十年四月、戦争激化により、母と妹（南）とともに、世田谷を離れ相模湖の側に疎開するまで、麻那が世田谷で暮らした歳月は十七年、六歳から二三歳のことである。

麻那にかかわる文字資料から読み取れることは、ごく幼少期に形成された麻那の「感性」は、原田ファミリーが暮らした、我孫子町手賀沼畔（注2）の自然が大きく影響していたように思われる。麻那自身が次のように語っている。

幼児のとき、黄色と黒縞の虎が出てきた夢、手賀沼の森の向こうに沈む大きな太陽、やぶがらしの蕾の美しい色調など、強烈な幼い記憶が、私の仕事に大きく影響しているのだと思う。

〈自己に出会う〉作品写真集「原田麻那の染織」
実物織裂二点付き（原田麻那著 足立龍太郎発行
求龍堂 一九九八年五月二六日 初版発行）

麻那が織物にむかつて意匠を考えると、突然として形成されるモチーフは、子供のころ（註：我孫子の家の門柱に寄りかかつて見ていた巨大な落日であり、北條というところの外房海岸に打ち寄せる鋼色をした屏風のような波であった。それらの映像は、血の中に溶け込んで、麻那の身体をつくっている）としか考えられなかった。

〈創作のモチーフ〉『芸術生活』おんなの辞典¹²
原田麻那（草柳大蔵執筆 渡部雄吉撮影 昭和
三九年一二月号）

また、世田谷の頃における小学校から高等女学校までの、またその後の十年に及ぶ学びの蓄積「教養」が、作品に与える影響については、大成後の麻那自身が、かく語っている。

私の画への気持が着物そのものを画面として考え、私独特の織のスタイルを作り、また、文学好きが物語性や抒情性を作品の中に出しているのだと思う。私はこれを「白い紙の上に砂鉄をばらまいたように」とり止めもなく勉強していたものが、織物をするこ

とによって、磁石を紙の裏にあてたようにさっと集まって何かの形を作ったのだ」と説明している。

「原田麻那の染織」（前出）から

一、柳悦孝先生と原田麻那

麻那の人生における重要な「出会い」には、原田京平・睦夫妻が麻那のために「自由で創造力を育む教育」を求めて出会った、明星学園の教育者赤井米吉、そして、麻那が二十代で弟子入りした、染織の指導者柳悦孝により、その才能を開かせ、育み、やがて染織家として、国画会工芸部の重鎮となり、活躍することになるのである。

さて、私は何をしよう

母を見て育った私は、女でも何かを身につけて生活出来なければと子供の頃から考えていた。しかし好きな画では自活するほどの力量はないとあきらめて、ただ好きなだけの『万葉集』を松村英一に、暉峻康隆（てるおか やすたか）の芭蕉、蕪村を、ルネッサンスを富永惣一に、中島健蔵からフランス文学を、はては哲学を清水幾太郎から、田中俊雄から民芸の話等々、当時の私には何の足しにもならないであろう講義をとりとめもなく三年間聴きまくった。（中略）

私の卒業した明星学園は、大正時代に成城学園から離れて、新しく赤井米吉先生その他の先生が作られた自由主義の学校で、朗らかがモットーであった。クラス中で演劇をしたり、私が先生にお願いして油絵の美術部を作ったり、ときどき皆で散歩の時間をねだって井の頭の田園を歩いたり、学校は楽しい所であった。

考えてみると私は今さらながら真面目な勉強はしていなかったようである。

その園長の赤井先生が、「マナさんは何かしやうだから教ゆるのが楽しみだ」と父兄会で母に言われたそう、卒業して十年も何もしないのでは、「せつ

かくの教育者に会わず顔がないではないか」とひそかに思い悩み続けていたことであつた。

「原田麻那の染織」

昭和二十三年、麻那、柳悦孝先生に弟子入りする

そして、「何も出来ないなら死んでしまえ」と私は私に命じてみた。

私は死にたくはないのでディレタントを止め、柳悦孝先生の弟子になつて染織を習いはじめたのは、昭和二十三年二十四歳のときのことであつた。

「原田麻那の染織」

柳先生の糸車

昭和二十三年九月一日、それが柳悦孝先生に弟子入りした第一日、先生は糸車を作つて待つて下さつた。この糸車は今もなお私は有り難く使い続けている。

「同」

*DVD「遙かな異国への憧れを織る 染織家 原田麻那」(財団法人常陽藝文センター 一九九八(平成一〇)年制作 21 分)に、その糸車をまわす麻那の映像が有る。この糸車は、麻那逝去後は、笠間芸術村の工房で弟子さんが使用されていると聞いている。その糸車は、現在も、廻り続けているのだろうか？

祖母の願い、父の願い

元来、祖母が天竜川支流の山家の出で、その地方の織の名人であつた。新しいことをいろいろ工夫し、近所の人がその織帖を借りにきたりしていた。子供達七人にはつぎつぎと織つたものを着せていた。父(*原田京平)はこのほか手織が好きで、画を描いていた母(*原田睦)に着物をすすめたりしたが、江戸っ子の母は見たこともない機などで織る気もなかったのである。父は旅先で見つけた手織を母に着せて楽しんでいた。うちでは他のどれよりもそれら

の手織が一番尊くすばらしいものだと思つていた。

戦後母は私に織物をすすめ、私の生まれた我孫子時代からの知人、当時は民藝館長になつていらつしやつた柳宗悦先生にお願いして甥御さんの柳悦孝先生をご紹介いただいたのである。

今は亡き祖母の願い、父の願いがものも言わずに私のところまで達した不思議さを解きたいのである。人生に偶然等というものは一つも無いという説がある。「天網恢恢疎にして漏らさず」ともいう。かくして私は織物を一生の仕事としたのである。

「原田麻那の染織」

祖母がつむぎ母が織りたるこの着物

父が着たるを吾に給ひたり

原田和周著 「雲の流れ」大正十五年(家にて)

この短歌は、歌人でもあつた原田和周(京平)が詠んだものである。

この歌からは、代々続いてきた原田の実家の暮らしがうかがえるようである。

原田は昭和六年から七年にかけて、朝鮮へ画作のための旅行に赴いている。このことは、我孫子在住期からの柳宗悦との交友によつて強い影響を受けたものでもあろうが、もともと手作りの良き、民藝の美を愛する傾向が、原田の血のなかに有つた事が想像されるのである。実際、現地で朝鮮の工芸品を蒐集しており、それらは現在、我孫子市白樺文学館に寄贈されている。

京平自身は満四十歳で病のため早世するが、その芸術の、特に工芸への志向が長女の麻那に引き継がれ、悦孝の厳しくも愛情に充ちた指導のもとで、その豊かな天分を開花させ、やがて膨大な数の染織作品をのこすことになつたのである。

師柳悦孝から教えられた、織る事、の精神の厳しさ― 「機織口伝」に見る織ることの精神

麻那が手織りの仕事を始めたのは昭和二十三年九月。それまでの麻那は九重織のネクタイや袋物を作つて暮らしていたのだが、その作品が柳悦孝の目にとまり、口添えを得て(前述)悦孝の門を叩いたのである。戦後のこととて師匠一人に弟子一人である。麻那は悦孝にびつたりといつて、糸の紡ぎ方、染織の方法、織り方の種類を習つた。

木枯らしの中で部屋が冷えてくると、悦孝はみずから炭火をおこし、貴重な米を釜にかけて振る舞つてくれる。麻那にとって、柳の作業場は道場に匹敵した。

悦孝は、麻那がようやくひとりで機にすわるようになると、古びた和綴じの本をとりだしてきて「貸してあげるから読んでくらん」といった。その小冊子は江戸時代に上梓されたもので、題字に「機織口伝」とある。

冒頭、「ソレ機ヲ織ルトキハ」とはじまり、「腰カケニ乗ルトキハ馬ニ乗リ梭ヲ放ツトキハ弓ヲ放チ梭ヲ受ケルトキハ居合ノ刀ヲウケルガ如シ」と心の態様をのべている。

麻那は、江戸時代の機工がこれほどの純粹持続を心得ていることに驚嘆した。そこには技に先行して道があつた。いや、道がなければ技はボケて拙いものになる。

(おんなの辞典 12 原田麻那)

*「機織(はたおり)口伝(くでん)」について、所蔵の有無を国会図書館に問い合わせたところ、次のような回答を得た。

典拠に挙げられている題名と引用の文章が一致している文献は見当たらない。しかし、類似の題名と内容が記された文献としては、次の二件がある。

1、「織物之伝」(福田亀市―福田染織工場 明治二十八年四月)

2、「日本科学古典全書 復刻8」(三枝博音 朝日新聞社 千葉県立中央図書館所蔵)

大関増業 『機織彙編』巻之三 「機口伝」553
554p

大関増業(おおげきますなり)：天明二年八月一日

伊予大洲藩主加藤泰みちの末子、江戸で生まれる。後、大関家の養子。

「夫機を織る手前は」で始まり、「腰懸板に腰を打懸る事は、馬を馭るが如く、(中略)梭を投る事は矢を放して飛すがごとく、(中略)梭を取る手は居合を抜がごとく(以下略)」とある。

次に記すのは、麻那自身が記した語った、恩師柳悦孝への思いである。

手取り足取り

有り難いことに柳先生は、何も知らない私を手取り足取りお教えくださり、それが今日まで続いている。

「原田麻那の染織」

先生に「ウン」と言っていたきたいばかりに

この本(註「原田麻那の染織」)が平成十年五月下旬にやっと出版の運びとなったわけです。

私が柳悦孝先生に師事してから、ちょうど五十年になります。その他の楽しみにして下さった先生

方も遠くに旅立たれた大変残念に存じますが、一番御世話になった恩人の柳先生にお目にかけることが出来ますことを、せめてもの慰めと存じております。

きつと柳先生は「まだまだ」とおっしゃることでしょう。私は柳先生に一生の間に「ウン」と言っていたきたいばかりに仕事を続けてまいりましたが、私自身がまだまだと思っております。

平成十年四月三十日(あとがきにかえて)
「原田麻那の染織」から

「まあまあだね」が、柳先生の最上のほめことば

「君は無器用でよかったね」とも先生はおっしゃった。無器用な人は悩んで深くなくてゆく。器用な人は、簡単に出来てしまうから深くならない。満足をしなくてはだめなのだ。(DVD)

二、麻那の仕事、麻那のことば

・表現したいもの(イメージ)が先にあって、織り方を考えるという方法。

・他人がやらないことをする。

・私の着物は、ひろげても、まともでも良いものである。

・植物染料は美しく尊いものであるが、現代は酸性雨などがあって、変色もし易いという条件下にある。だから、変色しにくい化学染料を用いる事になっている。きれいで美しければ良いので、植物染料にこだわらなくても良いのである。(DVD)

「めがね」から「連珠文(れんじゅもん)」へ
人の真似はもちろん、自分の真似もすまい

五十年間、どれほど多くの方々が私の仕事を支持して下さったものか、そのお陰で好きなように織物が出来、次々にアイディアが勝手に生まれて来たのである。最初からデザインおまかせの仕事ばかりさせてもらってきたのは幸せというものである。私のモットーは「人の真似はもちろん、自分の真似もすまい」ということで、かなりしんどいときもあった。しかし、糸を、色を、デザインを少しずつは変えて、いわゆる「めがね」―不風流なネーミングであろう―この織り方だけを八年間続け、もうこれ以上の工夫が出来ないところまでやってみて、「連珠文」と名づけた織り方を創案したのである。

正倉院で見たシルクロードの花喰鳥が銜えている連珠を表現してみたくて、「連珠文」を考案した。(DVD)

筆者が、直接聴き取った麻那のエピソード

次に記す麻那にまつわるエピソードは、平成二十三(二〇一一)年九月三十日、清水明子先生(女子美術大学名誉教授・注3)の個展会場銀座和光にて、清水先生、他に生前の麻那を知る二人の織物作家の女性(国画会会員)から、直接聞き取り、文字資料に書かれていた事項について、確認出来たものである。

食事時間は一五分と決めて、機はたに座り続けた

麻那は織物をはじめてみて、なに気ない地紋や縞に、じつに数百年の昔から、人間の知恵が織り込まれていることをしみじみと味わった。織り方を考えれば考えるほど、伝統の重さが身体にのしかかってくる。綜こうを四枚使うとすれば、四本の経糸をどういう順序であげるか、その順列と組み合わせによって織目はさまざまに変化するわけである。

麻那の血の底流にその組み合わせ方を理解するものがあつた。麻那は古い裂地の中に、あたかも昨日発見されたような新鮮さで経糸の組み方を見た。

三年間織つて織つて織りぬいた。無類に好きだった読書も映画もふつりと絶った。食事の時間を一食十五分と決め、食事がおわると走るように織機の前にかえつてきた。麻那は織機から何時間も離れるのは寢床に入つてるときだった。―私のように、馬鹿で無能で無器用で、それでいて死ぬこともできない女は、織るより仕方がないではないか。

それが、自分に生命を与えてくれ、物を感じさせてくれる「なにか」への回答ではないか。

そのように態度を決めると、麻那が三十年近い人生の中で感じとつたさまざまな詩情や映像が、いちどに鮮烈な度合いでよみがえつてきた。

雅楽のメロディーを口ずさみながら機を織つた

麻那は、雅楽を好んだ。雅楽たとえば、『越天楽』を口ずさんでいると、おどかなのびやかな時代の山のたたずまいや風情が眼の底からせり上がってくる。麻那は、雅楽のタイトルをテーマにして、二枚の着物を織つた。一枚は、「蘭陵王（らりようおう）」、蛇の王様の話。もう一枚は「納曾利（なそり）」、まねをすることを「なぞる」というが、その語源がこの雅楽のタイトルから来ている。この二枚の着物は好評だった。

（おんなの辞典12 原田麻那）

*「蘭陵王」とは「羅陵王」のことか？

「君は機織はたおり虫だね」と柳先生がおっしゃった
*「食事時間は十五分」ということと、『越天楽』など雅楽のメロディーを口ずさみながら機を織つた」ということは、本当のことであるが、『越天楽』などよりもっと難しい曲であつたこと、麻那の仕事のリズムに合わせるのに、糸を紡ぐお弟子さんは大変で

あつたことなど、綿貫倫子氏（国画会会員・織物作家）から聴き取ることができた。

綿貫氏は杉並時代（注4）の麻那を知る人で、また、ご同行の友人の方からは、麻那が柳先生から、「君は機織り虫だね」と言われた」と言う事を教えていただいた。このエピソードは、実に貴重なものと思われる。柳先生が、麻那への親愛表現として用いた、「機織り虫」について書かれた資料には、未だ出会っていない。また、他の人が使用していることも聞いたことは無い。それ故、このエピソード「機織り虫（はたおりむし）」を、この稿の題名にさせていただいたのである。

綿貫氏は展示会場で偶然お会いした織物作家の方であるが、以来、毎年国画会展（国展）の招待状をお送りいただいている。実にありがたいことなのであるが、昨年はコロナ大流行の頃であつたので、失礼をしてしまった。それから、残念ながら、同行の御友人のお名前は、伺つておらず、これもまた、申し訳ないことであつた。いつの日か、お二人との再会を心から楽しみにしている。

なお、この日、清水明子先生にお会い出来るようになり計らつてくださったのは、女子美術大学の三ツ木知昭氏（総務企画部長（広報担当）兼広報グループ長）である。知昭氏は、「晩年の志賀直哉」の著者三ツ木照夫氏の御子息である。幼少の頃は、よく照夫氏に連れられて、志賀直哉家に遊びに行つた、とのことである。「志賀先生のお宅で千足屋のメロンを食べさせてもらえるから、ついでに」とは知昭氏のお話である。

麻那の織物の心象世界

「千古の昔から続く潮騒の音」

夏のある日、伊豆半島の西海岸を南端近くまで行つた。船を出してわずかに沖に出たが、光は透明な水をつらぬいて海底に達していた。麻那の眼に、海藻のゆらめきやその間に棲むイソギンチャクなどの生物が映つた。サンゴのように赤いものもあつた。麻那は息をのんだ。そこに麻那の織物の心象世界があつた。

秋の白い風が訪れたころ、織機の上に、海底の光のゆらめきがとらえた生物の色が氾濫した。麻那は織つた。織りながら耳に優しい潮騒をきいた。それは千古の昔から続いている潮騒であつた。

ビデオテープ「染織家 原田麻那」

（平成一〇（一九九八）年財団法人常陽藝文センター）

「万葉集、雅楽、シルクロードなどをイメージ」

繊細な染めと織りで、万葉集、雅楽、シルクロードなどをイメージした幻想的な作品を制作し続ける原田さんをアトリエに訪ね、作品に寄せる思いを聞く。（国画会会員、笠間市在住）

DVD「遙かな異国への憧れを織る 染織家原田麻那」（財団法人常陽藝文センター 平成一〇（一九九八）年）

「遙かな異国への憧れを織る」

ごあいさつ 財団法人常陽藝文センターでは、郷土作家展シリーズ第一二六回として、「遙かな異国への憧れを織る 原田麻那展」を開催いたします。日本の伝統色に彩られたモダンな文様の作品を制作し続けている染織家・原田麻那さんは、大正一年千葉県我孫子市に生まれました。画家の両親のもとで美術への関心を深めました。父親が若くして他界したのをきっかけに、「女でも何かを身につけて生活できなければ」と思い定め、昭和23年、

母の勧めで染織家の柳悦孝氏に師事しました。その翌年に早くも国画会に初入選を果たし、以後、染織一筋に歩んでいます。

原田さんは、万葉集、雅楽、シルクロードのイメージや自然の情景などを抽象的に表現した作品を制作してきました。その多様なモチーフについて、原田さんは、学生の頃から興味のおもむくままに学んでいた芸術や文学の知識の断片が、染織を始めたことによって「散らばった砂鉄が磁石に集まるように」ひとつにまとまり、作品に生かされてきたと語っています。

また、正倉院に伝わる連珠文を表現する織り方をはじめ、様々な表現方法を研究し、その技法はシルクロードのモチーフなどで生かされ、高い評価を得ています。さらに繊細な糸遣いの着物のほか、素材に工夫をこらしたタピストリーなど、建築内部の装飾品も制作し、多くの人々の目をたのしませていきます。今展では、作家歴50年を迎える原田さんの優品八点を展示いたします。

原田麻那顔写真

「未知の国を旅して、湧いてくるものをつかまえる」

○出品目録○

谷神譜	昭和三八年	着物	第三七回国展
羅陵王	昭和四一年	着物	
雪果	昭和五一年	着物	第九回潮展
雪月花	昭和五二年	着物	第五一回国展・
第一〇回潮展			
連珠華文	昭和五三年	着物	
月牙泉	昭和五六年	着物	第一四回潮展
黄鐘	昭和四五年	タピストリー・169×77	
風動・幡動	昭和四九年	タピストリー・78×113	
茨城県			

リーフレット「遙かな異国への憧れを織る」原田麻那展
一九九八・九・九(水)～一〇・一一(日)

会場 藝文ギャラリー 主催(財)常陽藝文センター

*連珠文Ⅱ珠の形を連ねた文様。古代アジアの装飾品に多用され、七世紀頃日本に伝えられた。

*このリーフレット「遙かな異国への憧れを織る」は、「原田麻那展」の図録の有無を問い合わせたところ、当時、図録は作成せず、このリーフレットを作成し配布したとのことである。在庫があるとのこと、藝文センターのご厚意で一部送っていただいたものである。

麻那のデザイン方法

私の画への気持が着物そのものを画面として考え、

私独特の織のスタイルを作り……

私の画への気持が着物そのものを画面として考え、私独特の織のスタイルを作り、また、文学好きが物語性や抒情性を作品の中に出しているのだと思う私はこれを「白い紙の上に砂鉄をばらまいたように取り止めもなく勉強していたものが、織物をするこ

とによって、磁石を紙の裏にあてたようにさつと集ま

まて何かの形を作ったのだ」と説明している。

私は多くの場合、デザインののためのデザインはしたことがない。額のところでモヤモヤと、こんなものが作りたかったり、頭の芯でそれを統一したものにまとめる。それが万葉の歌であれば、その歌から受けるテーマの色が決まり、経糸を経て、およそのコンポジションがきまる。そしてその歌を歌いながら喉が渇くように朱色や茶や緑や黄が織り込こまれる。もし同じ経糸でもペルシアンマーケットの歌を歌えば異なったものが出来上がる。だから私の頭の中のモヤモヤは織り上がったときによく姿を現わす。出来上がったからこの色がなければとか、この場所はやや上にあるべきだと感じても画を描くように塗りがえたりするわけにはゆかない。

しぐれの雨まなく降りそぐれないに
におえる山の散らまくおしも

「万葉集」
某の花や月は東に日は西に
蕪村

えこの花流れ溜ればにおうなり
草田男

南伊豆の海の底を玉藻に、雅楽、羅陵王、黄鐘調、その他、そして西域、シルクロードのイメージを飛天、草原や月牙泉他、かなり沢山作った。あるとき、新聞に十行足らずの「黄河の源流」は、実は星宿海という山岳の湿地帯であるらしい。という記事を読んで、ぱあっと田毎の月のように星の光った湖が目の前に見えた。しかし、これは月であってはいけない。悩んでいるときマリーナ何号かがシャープな金星をテレビに写し出したので、これぞと右肩に綴れで金星を現わしてきました。

いつかシルクロードに行つてみたいと思つて『法頭伝』や花喰鳥や連珠文の書物を読んでいたが、正倉院の阮咸を見て連珠文を現わす組織を三年がかりで考案した。しかし、シルクロードブームが来て、シルクロードの着物を作るのは気がひけている近年ではある。月牙泉、星宿海を映画やテレビで見て私の思った通りであつたのでいささか面白いものだとも感じている。

最近「ギルガメッシュの王城」や「龍王の庭」を作つて、この先、何を題材にしようかと考えている。昔、「雪図」を作つて以来雪が気に入って、「雪」、「雪果」、「雪国」等々いろいろな雪を作つたり、「落暉」など皆頭の中で自然の写生をしている。

「原田麻那の染織」

~~~~~

次号へ続く

## あびこだより119号

放談くらぶ

## 「童謡詩人 清水かつらと手賀沼」

原田 幸四郎

「靴が鳴る」「叱られて」「雀の学校」の童謡作家清水かつらは、大正十二年、手賀沼を遊行し、童謡「葦（よし）きり」、「ぬまのほたる」の二作品を書いている。

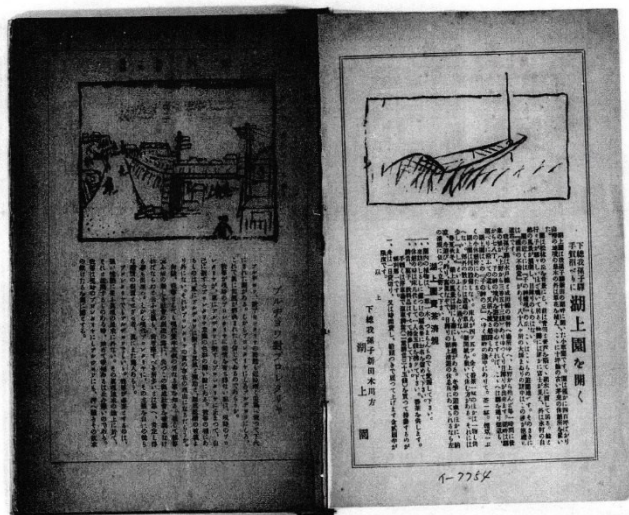
彼と我孫子の繋がりには、俳人岡野知十が仲介者であった。俳句を嗜んだ清水は、岡野に師事しており、彼が主幹していた雑誌「郊外」の編集を任されている。岡野は里見弴が手放した別荘地を入手し（名義人は次男木川恵二郎）「湖上園」を開いている。個人保養施設というより、多くの人に利用を勧誘しており、他の文人別荘とは趣が異なっている。湖上園の場所や入手の経過は、この度的小林康達氏の力作「手賀沼・我孫子別荘史」に詳しく書かれている。雑誌「郊外」から数か所コピーしたので、若干補足してみる。

岡野知十自身も「郊外」に「納屋をすまゐるに手賀沼に而（シカ）して」と「手賀沼に遊ぶ記」を寄稿している。また、湖上園の案内廣告「下総我孫子驛手賀沼べりに湖上園を開く」を掲載しているが、その案内が誠に面白い。創刊六号には、我孫子の特集を組んでおり、木川恵二郎「我孫子案内記」、岡野かをる「手賀沼の秋」、清水かつら「私と我孫子」が掲載されている。小林氏は「木川と岡野は兄弟」と紹介しているが、清水の解説は少ない。そもそも「木川恵二郎」と「岡野かをる」の二人は、共に「岡野知十の息子」であったことは初見であった。

清水かつらを永年追いかけた身としては、岡野かをるは清水に近い、童話作家であった。清水は、日本橋丸善の子会社「中西屋書店」に属した「小学新報社」が発行していた絵雑誌「少女号」の編集者であった。他の編集陣が凄腕。「浜千鳥」「お山の大将」の鹿島鳴秋（めいしゅう）、井口長二（後の山手樹一郎）がいた。この絵雑誌には、無名時代の作家や画家が、糊口を凌ぐために投稿をしている。岡野かをるもその一人であった。フランス童話を二〇近く作品が確認出来る。

他には、林芙美子、サトウハチロー、中西悟堂、山本周五郎、伊丹万作（伊丹十三の父）、室生犀星らが確認出来る。木川恵二郎も少女戯曲「雪ぞら」を投稿している。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。



## 前号の誤記（お詫び）

前号では2頁以降の欄外の号数を第205号と表記しました。正しくは206号です。また、編集後記に記載の3月末会員数に誤謬がありました。正しくは、男性34名、女性26名の60名でした。（あしたか）

## 手賀沼公園文学の広場が整備されました

手賀沼公園から手賀大橋に向けて整備していた湖岸堤遊歩道が令和七年三月一日から全面開通し、途中に設置された文学の広場が綺麗に整備されました。

この広場は、当会も名を連ねた市民団体による文学の広場再生活用の要望を市当局に要請して来た経緯もあります。

文学の広場に和歌の掲示板があります。九月は、当会の短歌会の作品が出ています。



八月 放談くらぶ 参加感想文

## 「世界遺産を楽しく学ぶ！」 「我孫子から30分で行ける世界遺産」

芦崎 敬己

八月一七日(日)我孫子市民プラザ会議室1でモダン建築愛好家の村上千明氏による「世界遺産を楽しく学ぶ！」我孫子から30分で行ける世界遺産」の放談くらぶに参加した。

会場は三〇人の参加者が集まり、演題の『世界遺産』『我孫子から三〇分で行ける』に対する参加者・市民の関心の高さを感じた。

村上講師は、名古屋生まれ、名古屋育ち、名古屋での勤務経験が長く、退職を機に我孫子市に転居された。しかし、元々建築家ではなく、全国の名建築、特に「モダン建築」を見て歩くことが趣味という。以前の勤め先の関係で「世界遺産検定」の仕事を手伝うこと並行して行っているそうだ。

講演は、世界遺産に関する基礎知識を前半に、後半は、我孫子から三〇分で行ける東京都内唯一



の世界文化遺産「国立西洋美術館」について、設計者のル・コルビュジエ(仏)や博物館の建設に尽力した日本人建築家についても限なく講演された。

講演は、三択等のクイズ形式を取り入れ、参加者参加型で考えながら、楽しく学ぶことができた。



第二次大戦直後に設立されたユネスコにより世界遺産条約が一九七二年に採択された。その切掛けは、エジプトナイル川にアスワン・ハイ・ダム

の建設が計画され、建設によりアブ・シンベル神殿が水没の危機が出て、「世界共通の宝」「人類共通の遺産」を守る理念のもとに世界遺産の登録に繋がったことが元になった。

世界遺産には、「文化遺産」「自然遺産」と併せ持った「複合遺産」の三種類がある。壁画『最後の晩餐』は世界遺産登録ですが、絵画『モナリザ』は、世界遺産でない。それは、世界遺産には「動産」が含まれない為だそう。

一九七八年の最初の世界遺産の登録は一二件、日本での最初の登録は、一九九三(平成五)年の『法隆寺地域の仏教建造物』(文化遺産)だった。

今年八月現在で、二六件(文化遺産二一件・自然遺産五件)が登録されているとのことだった。

講演は、「国立西洋美術館」の解説まで続きましたが、「国立西洋美術館」については、拙文をお読みの方が、是非、上野公園にお出掛けになり、「人類共通の遺産」を感じて頂ければ幸いです。

◎＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝◎

## 新人会員紹介

### 「文化を守る会」に入会した」

渡邊 敦子

昨年退職を機に、十月から「文化を守る会」に入会させて頂きました。結婚後我孫子に住むよう

になって、自然に恵まれ歴史のあるこの地に魅力を感じ、もっと知りたいと思っていました。

二〇〇六年、市の「手賀沼文化拠点整備計画」委員会に公募の市民として参加して、まずまずその気持ちが強くなりました。応募した時点では知らなかったのですが、この委員会はその後の整備計画の基本構想を作ることが目的で、多くの分野の方々が参加し、検討委員会と起草委員会を合わせると三十回以上、長い時間をかけ計画案が作られました。この時参加されていた越岡さんを通して「文化を守る会」の存在を知りました。ただ、半年の任期を終えた後、初志につながるアクションを起こすことはありませんでした。当時は遠距離通勤で仕事に追われていました。

その後、勤務先が我孫子高校に変わって暫らく経った二〇一四年、ひよんなことから楚人冠邸の市民茶会に協力させていただくことになり、暫らくしてからそれが自分の携わった文化財活用の一環だったと気づいた時は、本当に驚きました。不思議なめぐりあわせを感じ、何かが初志を思い出させてくれたように思いました。

いつか我孫子のことをちゃんと学んでその魅力を発信したいという思いをずっと先延ばしにしていたので、入会は私にとって大きな一歩でした。気持ちにはあっても我孫子の歴史や文化について知らないことばかりという状態なので、しっかり学びたいが今の気持ちです。一口に歴史文化といっても多岐にわたりますが、まずは我孫子に住んだ先人のことを知りたいと思っています。今のような知育偏重の時代に、豊かな感性を持ち、地に足の着いた暮らしをしていた先人から学ぶことは多いと思います。会員の方々にとっては、当然と思えることでもわかっていないことが多いのでいろいろ教えて頂きたいです。

(令和六年一〇月入会)

## 第五十四回「短歌の会」 作者推薦一首

七月二二日開催

吾が家にもドリフのちゃぶ台在りし頃  
夕餉ほほばり沢庵喰ひたり

佐々木 脩

擦れ違ひの電車の明りが遠ざかる  
再び会わぬものは美し

伊奈野 道子

梅の実のへたを取る妻甲斐甲斐し  
氷浮かべてジュース飲む孫

芦崎 敬己

樹の下にもぐりて落ち葉かき出せば  
ねぐら荒らすなど蚊に攻めらるる

納見 美恵子

深緑の光注ぎ込む会食の

五月(さつき)御膳に歓談たけなわ

村上 智雅子

野の花よ誰が名付けたどくたみ草  
可哀想だな白い小花よ

前原 安世



## 当会の行事予定

## □ プロジェクト 「短歌の会」

第五五回短歌の会 けやきプラザ 10階小会議室

日時 九月三〇日(火) 13:30

第五六回短歌の会 けやきプラザ 10階小会議室

日時 十一月二五日(火) 13:30

◎短歌を初めて学ぶ方、一緒に仲間になつて、  
短歌を楽しみませんか。(参加費無料)  
問合せ ☎(090-5333-1804(村上))

## □ 「放談くらぶ」 (概要は10頁を参照)

日時 一〇月二六日(日) 一四時～一六時

場所 アビスタ第二会議室

演題 「童謡詩人 清水かつらと手賀沼」

講師 原田 幸四郎氏

参加費 300円

## □ 史跡文学散歩 「日本橋界限を歩く」

日時 一〇月二二日(水) 九時(我孫子駅改札

口・集合) 一五時半頃(我孫子駅解散予定)

・行先 中央区日本橋(詳細コースは当日説明)

・講師 越岡 禮子氏 (当会顧問) 雨天決行

・参加費 五〇〇円(会員無料)、他昼食代等

・申込 九月一四日～一〇月五日の間にメール

を送つて下さい。(詳しくは3頁下段左を)

・問合せ先 〇80-5029-6844 (芦崎)

## 参考 市史研結成五十周年記念歴史後援会

「幕末・維新期における村々の動向

―根戸村の史料を中心に―」

講師 久留島 浩氏(歴史民俗博物館 前館長)

日時 十月十三日(月・祝) 十四時

場所 アビスタ・一階ホール

入場料 五〇〇円、(先着一二〇人)

## 短歌の会メンバーのランチ会 開催

去る七月二二日、短歌会第五四回例会の前にメンバー六人で、我孫子駅近くの洒落たお店で鮎ランチ会を開催しました。食事をとりながら互いの短歌への心持ちや日頃の関心事を気さくに話して、充実した楽しい時間でした。あなたも仲間に入つてご一緒しませんか。



編集後記 ▼既に誰しもが体感している様に今年(二〇一五年)の夏の平均気温は、統計開始以来最も高い十二・三六度(基準値偏差)と気象庁が発表した。梅雨入りや明けも早まり、九月に入つても猛暑日が続いている。気候の変動は、異常気象の増加をもたらし、コメや野菜の農業、漁業・酪農等の食料生産に関わり、経済活動に影響を及ぼすことが懸念される。待ったなしの状況だ。▼九月一日、関東大震災から一〇二年が経過した。あらためて、大規模地震だけでなく、防災意識を高めたい。▼九月一日、もう一つ記憶に残すべきことは、震災直後の朝鮮人殺害である。震災後の不穏な状態で、朝鮮人が井戸に毒を入れた、日本人に危害を加える等の根拠の無いデマが飛び交った。多くの自警団や民衆が呼応し殺害に手を染めた。亀戸事件や一昨年映画になった福田村事件(行商で来た地方訛りの日本人に対する殺害)の例がある。先の参議員選挙期間中に外国人を揶揄し差別する言動が目についた。今後益々根拠の無い言動や差別を看過することは出来ない。(あしたか)

## 六月二一日 放談くらぶ内容

## 「武者小路実篤と我孫子」

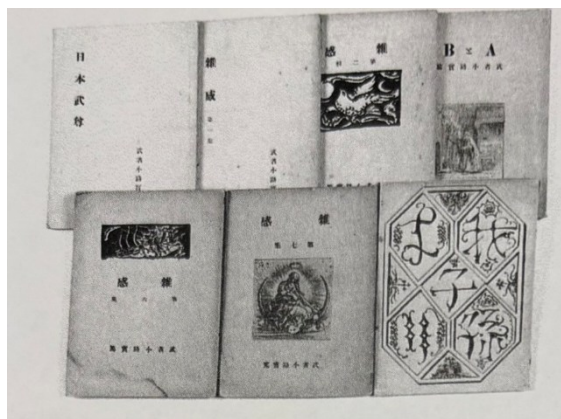
— 志賀直哉との絆に触れながら —

村上 智雅子

〈はじめに〉

小説家であり、劇作家であり、「新しき村」の創設者である武者小路実篤の我孫子時代についてはあまり調査・研究はなされていません。白樺派御三家と言われた柳宗悦の我孫子在住が六年半、志賀直哉は七年半に比べて、武者小路は一年九ヶ月という短い在住であったことにもよります。しかし、この短期間に想像以上の旺盛な作家活動や文化活動をしています。

まずは、我孫子刊行会と言う私設出版会を作り、八冊の自著を刊行し、我孫子町根戸の自然の中、彼のライフワークとなる「新しき村」を構想し具現化を試みました。短いながらターニングポイントといってもよい位の活躍を見せています。



我孫子刊行会本↑

実篤は、著書から直接読者に本を送ることを考え、我孫子刊行会を起こした。  
大正6年4月～7年5月にかけて、8冊が刊行されている。

この武者小路の我孫子時代を語るにあたって、武者小路の生い立ちを調べることで、より理解が深まると思います、ざっとお話ししました。

## 一、幼少時代 — 肉親の死と初恋の人との別れ —

武者小路実篤は明治一八年五月一二日、東京麹町で公家華族の家に、八人兄弟の末子として生まれました。父実世(さねよ)はドイツに留学して、明治の新政府に将来を期待された人物。恵まれた家庭環境ながら、八人兄弟のうち五人が肺結核で早逝します。当時、肺結核は不治の病で、こういうケースはままありました。しかも実篤が二歳半の時、父実世も同病で亡くなるという試練に会います。気丈な母秋子(なるこ)は経済的苦境の中、残された三人をしつかり育てます。兄公共(きんとも)は、学習院の初等科より卓越した優等生で、実篤も兄のお古の制服や教科書で上位の成績を保ちます。

しかし、一四歳の時、姉伊嘉子(いかこ)も同病で亡くなり、また翌年に出会った初恋の人おていさんも四年後、遠地に引越してしまふという度重なる肉親の死と淡い失恋は、実篤をもの思う人になり、そして文学への道に向かわせます。その導き手になったのは、母秋子の弟勘解由小路資承(かでのこうじすけ)ことでした。資承は当時三浦半島の金田でひととき隠世していました。このトルストイに心酔して半農生活をしていた尊敬する叔父に影響を受けて、実篤はトルストイを精読するようになります。

## 二、青年時代 — 志賀直哉と出会う —

明治三五年学習院の中等科六年の時、落第してきた志賀と同じクラスになります。初めはお互いに唯のスポーツ青年、頭の硬いトルストイ心酔者位の認識しかありませんでした。ところが高等科で二人が輔仁会(学習院の校友会)の邦語部(弁論部)の委員に推挙されてから、急に親しくなります。

或る時、講演会の講師に二人でフランス帰りの上田敏を頼んだところ、委員長から反対され、上田宅に謝罪に行きます。その折に、上田敏からメーテルリンクの思想と文学の広さと深さ・魅力を推奨され感動。このメーテルリンクとの出会いが、後々まで武者と志賀に影響を与えることになります。

当時、武者小路は、トルストイに心酔するあまり、その重厚さや禁欲主義に潰されそうになっていた。彼が読み始めたのは、小説ではなく、『懺悔録』や『人生論』などであったことにもよります。この実篤の苦しみをメーテルリンクの楽天的調和思想が解放し、自己肯定への道へと誘(いざな)つてくれました。

## 三、白樺時代 — 作家として自立 —

学習院を卒業した武者も志賀も各々東大に入学しますが、自分達が描いていた学問とは違うので失望し、共に退学。「自分たちが書きたいものだけを書ける雑誌」を創ることを目的として武者小路は、志賀や木下利玄と同人誌『望野』を創刊。里見弴は、回覧雑誌『麦』を、同じく柳宗悦等の創刊した『桃園』の三つの雑誌を統合させるような形で、明治四三年四月に『白樺』は呱呱の声を挙げました。

『白樺』は、文芸雑誌であると共に美術雑誌でもあり、作家としては武者小路実篤、志賀直哉、柳宗悦、木下利玄、有島武郎、里見弴、長与善郎等、美術家ではバーナード・リーチ、岸田劉生、富本憲吉、高村光太郎等でありました。内容は各人の創作ばかりでなく、西洋の文学や美術も紹介し、当時の文壇の主流である自然主義に対抗して、人道主義や理想主義を主張しました。それは閉塞した自然主義や文壇の天窗を開け、新しい光を注ぐこととなります。



志賀直哉との徒歩旅行 明治39年  
4月24日から30日まで、志賀と富士山麓、甲府、信州、前橋、赤城を徒歩で回り、友情を深めた。

一方、『白樺』は、お金持ちの坊ちゃん達の道楽だと批判もされました。しかし、武者小路の末歴を見てわかるように、各自幼時に試練を受けたつわ者でもあり、関東大震災で原稿が消失する一六〇号まで続くとは誰も思っていまませんでした。

その頃、我孫子に別荘を持っていた柳宗悦の叔父嘉納治五郎の隣に住んでいた姉の家が空いたため、そこに新婚の宗悦が住むことになり、柳は志賀を呼び、志賀は武者小路を誘い、白樺派を代表する御三家が我孫子に住むことになりました。我孫子は、風光明媚な所だけではなく、「東京の文壇やジャーナリズム」と適切な距離を持った土地で、彼等が白樺派らしい生活ができる好都合な場所でした。

#### 四、我孫子時代―「新しき村」を構想―

大正二年、実篤は今まで憧れていたタイプの女性ではなく、活動的で個性的な竹尾房子と結婚し、小説も矢継ぎ早に発表し、白樺派の中心的な存在になっていた。疲れもあって、大正四年、肺結核と診断され落胆していたところ、志賀直哉に「我孫子に來ないか」と勧められ、我孫子に転居を決意。

やがて誤診とわかりますが、一二月には我孫子町根戸字船戸の志賀の所有地に新築転居します。

根戸での生活は、景色に恵まれたものの不便な所なので、せめて賑やかかと思ひ、妻房子、養女喜久子の他に、金子洋文や砥上（とがみ）常雄、川島伝吉などの文学青年も入れ代わり同居しています。若い彼らの力を借りて、翌年四月には我孫子刊行会なるものを設けて『日本武尊』かちかち山『AとB』など八冊の自著刊行しています。瀧田浩氏の「武者小路実篤の求めたもの―我孫子時代と「新しき村」―」によると、この刊行会は会員予約制のもので、予約者は二五〇余人であつたと言われています。

「新しき村」の発想は、こうした会員予約制の若い人たちとの交流に力を得て、かつて信奉していたトルストイの、貴族でありながらひととき半農生活をしていた生活スタイルに影響を受け、「新しき村」を自己の理想郷として構想したのではないかと思われまふ。

生活面では、我孫子に引っ越して来た折残っていた体調不良も回春堂の荒井医師の回診により健康を取り戻し、志賀や柳との家族交流や文芸談義に意欲を取り戻し、根戸の自然や手賀沼の水辺に癒され、トルストイに影響を受け、今まで自分が描いていた理想郷への思いが一気に湧き出し、翌七年七月には機関紙「新しき村」を刊行。九月には「新しき村」を建設するために、同じ志を持つ若い人達を集め、我孫子で発会式をして日向に旅立つ。

一方、志賀直哉にとつても武者小路が我孫子に來た事は、好機となりました。長女慧子を亡くしてスランプに落ち入っていた時で、志賀は武者小路との交流を励ましに刺激され、再びペンを執ることができました。大正六年五月には「城の崎にて」を発表し、七月には次女留女子が無事誕生し、父との長年の不和が解け、一〇月には「和解」を発表するなど、作家活動も実生活も好転しました。

武者小路が「新しき村」を立ち上げた時、賛否両論の聲が上がる中、志賀直哉は「自分は彼を信用している―「新しき村」の為に―」と言う一文を書いて応援します。その武者小路に対する真摯な一文は、心を打ちます。

#### 〈むすび〉

まるで糾える縄のごとくに二人の生き方はからみ合い、刺激しあつて、良い方向へ光ある道に導かれていくのがわかります。武者小路実篤も志賀直哉も我孫子で再生の力を得て、自分に相応しい生き方と作品、論考を生み出し、各々時期は異なりますが、新しい土地に旅立つて行きました。

講演後、現在の「旧武者小路邸跡」を所有されている三協フロンティアの監査役、石黒博氏から建物の由来や現在に至る経緯についてお話いただき、盛り上がりしました。私の拙い話ながら、中野区や流山市、取手市などから若い方々も参加され、いつもお世話になっている我孫子のなじみの方々にもご清聴いただき、心から感謝致しました。



我孫子での歓送会 大正7年9月15日 個人蔵  
新しき村建設の地を日向と定め、土地を求めて出発する前に、白樺同人や新しき村会員たちとの歓送会が、実篤の我孫子の家で行われた（2列目、坐っている2人目志賀康子、武者小路房子、3列目3人目柳宗悦、武者小路実篤、志賀直哉）